

## 大東急記念文庫蔵続華嚴經略疏刊定記卷第五の

## 訓点について

月 本 雅 幸

一

日本において漢文の訓読が何時創始されたかは今なお判然としないが、訓点の記入が奈良時代末に始められ、それが句切点と返点の記入であったであろうことが既に明らかにされている。その現存する最古の例は広く知られているように大東急記念文庫に所蔵される「続華嚴經略疏刊定記」巻第五である。この資料の返点については既に中田祝夫、大坪併治、築島裕、小林芳規の諸家によって言及がなされているが、その詳細な報告は必ずしも行われていないように思われる。筆者は幸いに平成十一年春に原本を詳細に調査する機会を得たので、ここにその結果を報告し、大方の参考に供したいと思う。

本書は卷子本一巻、巻首を欠いており、本文十三紙を存している。茶色の料紙（麻紙か）に一紙当り二十九行の墨界線を施してあり、文字は一行当り二十三字から二十四字で書写している。料紙の大きさは縦二十七・一cm、横は概ね五十・七cmを算する。元来表紙・軸が失われていたものに、新たに薄茶地の表紙と杉の素木の切軸を補っている。また、巻首が欠けているため本来の外題と内題は存しないが、尾題は「華嚴刊定記巻第五」とする（新補の外題は「華嚴刊定記

卷一(ママ)「首欠」とある)。

本書は現在十三紙を残しているが、本来は遙かに長い卷子であつたと見られる。本書巻第五は「大日本統藏経」第一輯第五套第二冊に収められているが、都合六十三頁を占めている。このうち、現存部は末尾の約十五頁に相当するに過ぎず、要するに現存部は本来の四分の一に満たないのである。概算すれば本来、巻第五は五十五紙程、全長約三十メートルを算する長巻であつたはずである。

さて、先学の指摘されるように、本書には朱書で漢数字の記入されている箇所があつて、これは返点と見られる。以下にその全例を掲げることとする。なお、配列は出現順とし、「(第一紙)」等は原本の紙数を示す。また、本書には朱書の星点で句切が表記される。これには三種あつて、漢字本文の右下にあるものは大きな句切、中央下にあるものは小さな句切、左下にあるものは返点を兼ねるものと見られる。ここでは右下の句切は「。」、中央下の句切りは「・」、左下の返点兼用の句切は「(左下)」と表記する。

(第一紙)

1、哀愍<sup>三</sup>等者悲憐<sup>三</sup>人天戀<sup>三</sup>少安樂失眞常樂長流轉<sup>一</sup>故・

2、次我<sup>一</sup>今下顛對<sup>二</sup>尊卑<sup>四</sup>己<sup>三</sup>・離我慢故推功於佛。

(第二紙)

3、今此爲<sup>四</sup>顯明爲等法「知」(補入)無常等故得離四倒於常等相心无倚<sup>一</sup>著・

(第四紙)

4、此地亦應<sup>三</sup>推求請問<sup>二</sup>第二地行相及果乃至第十地相及得果・

5、善知<sup>二</sup>諸地障對治成壞相・果得脩地法清淨(左下)轉行處非處殊勝相(左下)不退轉淨<sup>一</sup>

大東急記念文庫藏統藏華嚴經略疏刊定記卷第五の訓点について

6、則能成前隨諸地觀察所有功德。

7、四是故下結前思惟宜應速入。

(第五紙)

8、十願具生了普因・謂普賢行生因也。

(第六紙)

9、此具據麤顯色欲對治故說不淨

10、謂爲彼不信由惑起業由業感果者說十二因緣

11、方可爲說無性觀等・釋多貪(在下)等分名

(第七紙)

12、無著故我慢息・謂菩薩不以自具持戒見他不具陵彼自高故。

(第九紙)

13、科有二相・一分二方便

14、十中一觀心淨明徹見法性曰深。

(第十紙)

15、謂說十二有支相緣故起即顯流轉・非自然勝性等起相緣故不起

(第十一紙)

16、一「者」(白書抹消)者以彼無色定多惠少

17、二者因彼樂乘便

18、此亦二種・一爲權大乘根樂三身佛十力境界者乘便

19、後菩薩具足下結問中度脫・

20、第九答前紹三寶種使不斷絕問・

(第十二紙)

21、亦令證(左下)教(左下)行(左下)展轉不斷亦爾・

22、十中初四依正嚴・謂三業及土・

(第十三紙)

23、二明答結因成果徳問中無別行相

24、今此答中品有兩句。由束問中初二句爲一句故也

この例において、漢数字の「五」は「三三」「三三二」が五本)の上に重書され、「四」は「三三」「二」が四本)の上に重書されている。これらはいずれも朱筆である。

25、一答前於諸如來應正等覺百千阿僧祇劫修菩薩行所集法藏悉能守護問・

右の「答」字は「若」字に朱筆で加画して「答」とし、更にその右傍に白書で「答」字を記している。

26、二答前開示「演」(補入)説時諸魔外道不能阻壞問・

27、三答前攝持正法無窮盡問・

(第十四紙)

28、四答前於一切世界演説法時十(十時)を顛倒符により訂正)王守護問・

29、第二攝根三業。

30、五答前一切世間恭敬供養問・

右の「答」字は「着」字を白書で訂正して右傍に「答」と書き、更にその右傍に朱書で「答」字を記している。

大東急記念文庫藏統華嚴經略疏刊定記卷第五の訓点について

31、六答前諸佛護念同灌頂問・

右の「答」字は「若」字に朱筆で加画して「答」とし、更にその右傍に白書で「答」字を記している。また、「問」字は「向」字に朱筆で「門」字を重書して「問」としている。

32、由佛護念得身業威德無能映蔽(左) 語業威德無能屈辨・

33、七答前一切菩薩亦皆愛敬問・

右の「答」字は「若」字に朱筆で加画して「答」とし、更にその右傍に白書で「答」字を記している。

34、八答「く」(朱書白書抹消) 前得善根力增長自法問・

右の「答」字は「若」字に朱筆で加画して「答」とし、更にその右傍に白書で「答」字を記している。

(第十五紙)

35、問益物滅惑。二一

右の「益」字は「答」字の右傍に白書で記している。

二

本書は唐の慧苑の著述になる八十卷本「大方広仏華嚴經」(八十華嚴)の注釈書である。(2) その注釈態度は個々の字句の意義・発音を説くのではなく、華嚴經の本文を段落に分け、さらにそれを細分化してそれぞれの文段の大意を説明するというものになっている。例えば右に挙げた例文の2、即ち

次我今下頭對尊卑已離我慢故推功於佛

は八十華嚴の卷第十八(大正藏第十卷、九十五頁下段)の

我今承佛威神之力爲汝於中説其少分

に対する注釈である。

朱書で記入された漢数字は一見して返点であることが明らかであるが、初期の訓点資料の通例として、網羅的に記入されているわけでないこと勿論である。漢数字が原則として漢字本文の右傍に記入されていること、返点の「四」「五」にそれぞれ「二」「三」を使うことのあること(15、24の例)が注意される。また、22の例は漢数字が行の上から順に一、二、三と傍書されており、これが返読を示すのではないことは明らかである。思うにこれは「依正嚴」が例えば「正嚴に依りて」というように返読されるのではなく、上から下へ順に読まれるべきものであることを示しているのである。いわば返読しないことを示す符号と見られるのである。本書にはこの一例しか見えないが、初期の漢数字による返点<sup>(3)</sup>が、必ずしも返読のみを示すものではなく、むしろ文字の読まれるべき順序を示すという性格を持っていたことを示唆するものと思われる。

ここで本書の朱書の漢数字が何時記入されたものであるかを考えたい。本書には次のような奥書がある。

(本文と同筆)「無上菩提因

近事智鏡」

(別筆一)「延暦二年(七八三)十一月廿三日於東大寺與新

羅正本自校勘畢以此善根生々之中

殖金剛種斷一切障共諸含識入無罣門」

(別筆二)「以延暦七年(七八八)八月十二日與唐正本相對校勘取捨

得失楷定此本後学存意可幸察耳自後諸

卷亦同此矣更不録勘年日等也」

大東急記念文庫藏統華嚴經略疏刊定記卷第五の訓点について

これによれば智鏡なる僧が書写した本文を、延暦二年に東大寺に於いて某人が「新羅正本」を以て校勘し、更に恐らくは同人が延暦七年に今度は「唐正本」によつて「対校」し、その「得失を取捨」してこの本を「楷定」したということになる（右の「別筆一」と「別筆二」は互いに同筆であろう）。本書には漢字本文に対する墨書の訂正・校異、白書の訂正・校異、朱書の訂正・校異があつて、そのうちどれが延暦二年の奥書、同七年の奥書に対応するかが問題である。その中で朱書の漢数字（返点）の年代が考えられなくてはならない。

筆者（月本）は原本により次のような知見を得た。

A 朱書の訂正・校異には二筆あるらしい。

例えば第四紙に

六力用者謂處非處等十種智力故・

とあるが、右の「處」字（二箇所）はいずれも墨の「更」字の右傍に朱書で記されたものである。ただ、この二字は他の朱書に比して稍濃い色合いを示している。同様の濃い朱書は他に六箇所ほど確認できた。

B 漢数字の返り点は通常の朱書（即ち濃くない方の朱書）で書かれているらしい。

濃い朱書の漢数字は認めることができなかつた。

C 二筆の朱書の先後関係は分からない。

D 白書の訂正・校異と朱書（通常）の訂正・校異とでは朱書の方が新しい場合が多い。

同一の漢字本文に対し、白書と朱書が重ねて記してある場合がある。その際、白墨と朱の重なるの様子を見ることでどちらが相対的に古いかを知ることができる。例えば第四紙に

五境界者所化衆生多少異故・

とあるが、この「五」字はまず墨の「已」字が書かれており、それに白書の「一」印でこれが訂正されるべきものであることが示され、右傍に「共」字が白書される。その後それに重ねて朱書の「五」が書かれているのである。同様の例は他に三箇所ほど認められた。

E 前項とは逆に、白書の訂正・校異の方が朱書（通常）の訂正・校異よりも新しいと見られる場合がある。

例えば第十四紙で「九答前開闡諸佛甚密法」の「答」字は「若」字に朱書で加画して「答」とし、更に右傍に「答」と白書している。同様の例は前節の例34にも見られる。

F 朱書↓白書↓朱書のように記されたかと思われる例がある。

前項に似た例であるが、「若」字に朱書で加画して「答」とし、その右傍に「答」と白書する。更にこの白書の「答」の右傍に朱書の漢数字「二」を記入する。これは前節に挙げた例25、31、33に見られる。

G 白書の訂正・校異と朱書（濃いもの）の訂正・校異の先後関係は分からない。

H 白書が一種類に限られるか、或いは複数種あるかは判断することができない。

これらを総合してみると、朱書や白書の先後関係が不明であることから、どの筆が延暦二年と同七年の奥書にそれぞれ対応するかを指摘するのは困難であることが知られるであろう。従って現段階では朱書の漢数字が延暦二年と同七年の奥書のどちらかに対応する可能性が高い、というくらいに理解しておくのが穏当であろう。<sup>(4)</sup>

### 三

慧苑の「統華嚴経略疏判定記」は撰述から遠からずして本邦に将来されたい。天平二十年（七四八）十二月二十日の東大寺華嚴供所牒には「判定記」の書写のことが見えており、これが日本における書写に関する記録としては最も古い。<sup>(5)</sup> その後も奈良時代には書写がある程度行われていたようであるが、澄観の「華嚴経疏」（七八七）が伝わってから



は八十華嚴の注釈としては澄観の書が重視され、「刊定記」は余り行われなくなつたらしい。<sup>(6)</sup> そのためであろう、「刊定記」の古写本は極めて少ない。大東急記念文庫本以外の現在知られている室町時代以前の古写本には左記のものがあるに過ぎない。

- 小川広巳氏蔵本 卷第八本 一卷 奈良時代末期写
- 東大寺図書館蔵本 卷第九 一卷 奈良時代末期写
- 東大寺図書館蔵本 卷第十三 一卷 奈良時代末期写
- 東大寺図書館蔵本 卷第十三(別本) 一卷 奈良時代末期写
- 東大寺図書館蔵本 卷第二 一卷 平安時代初期写
- 東大寺図書館蔵本 卷第九 一卷 平安時代初期写

右のうち東大寺図書館蔵の五本は互いにならぬ筆者を異にしているといふ。<sup>(7)</sup> 本稿で取り上げた大東急記念文庫本は奥書から見て必ずや東大寺に伝わつたものであらうと考えられるから、この中には大東急記念文庫本と僚卷であつたものもあるかもしれない。中でも奈良時代末期写の卷第九には朱書による本文の訂正と句切点があるようであるから、<sup>(8)</sup> 大東急記念文庫本のような返点があることも十分考えられる。

古く華嚴関係の仏典には次のように句切点や返点のみが加点されている資料が知られている。

- 華嚴要義問答 延曆寺蔵 二卷 延曆十八年(七九九)写
- 華嚴文義要決 佐藤達次郎旧蔵 一卷 八〇〇年頃写

これらは訓点の記入が始められたばかりの原初的な形態を現在に伝えているものと見える。即ち、日本における訓点創始の場の少なくとも一つは奈良の華嚴専攻の学僧の社会だつたことを示唆するものであらう。<sup>(9)</sup>

今回取り上げた「続華嚴経略疏刊定記」の加点状況はこのような一連のものと合せて今後なお検討されるべきもので

あると思われるが、本稿ではその一端を報告した次第である。

注

(1) 中田祝夫「古点本の国語学的研究 訳文篇」「訓点資料解題」、昭和二十九年

同 「平安時代の国語」(土井忠生編『日本語の歴史』所収、昭和三十二年)

大坪併治「訓点語の研究」「反点の発達」、昭和三十六年

築島 裕「平安時代語新論」第二篇第一章、昭和四十四年

小林芳規「返点の沿革」(「訓点語と訓点資料」第五十四輯、昭和四十九年五月)

また、この資料の解説は川瀬一馬「大東急記念文庫貴重書解題 佛書之部」(昭和三十一年)に見える。

(2) 本書については次の論文に詳しい。

李惠英「慧苑『統華嚴略疏判定記』研究——八十華嚴経の翻訳と教体論をめぐって——」(『インド哲学仏教学研究』3、平成七年十月)

同 「慧苑と『統華嚴略疏判定記』」(『南都仏教』七十二号、平成七年十一月)

(3) この点については注(1) 小林論文に前掲例17に関する言及がある。

(4) この問題について先行研究は次のように述べる。

大坪併治(注(1) 文献)

「本文を見ると、校合は白・朱両墨を用ゐてゐるが、白が前で朱が後であるから、白が延暦二年の校合で、朱が同七年の校合と推定される」

築島裕(注(1) 文献)

「そして、上述の句読点、返点等はその校合の書入と同筆のやうであるから、それらも延暦二年・七年の筆と見ることが出来る」

小林芳規(注(1) 文献)

「返点の現存する最古の使用例は、大東急記念文庫蔵華嚴刊定記の延暦七年（七八八）朱点である」

(5) 注(2) 第二論文。

(6) (5) に同じ。

(7) 『東大寺蔵国宝重文善本聚英』東大寺、昭和四十三年四月

(8) 長笹淳伸「続華嚴略疏刊定記卷第九後半佚文追補——東大寺図書館蔵古写本二種によりて——」『佛教学研究』第五号、龍谷大学仏教

学会、昭和二十六年六月

(9) 同趣旨のことは既に指摘がある(注(1) 築島文猷、二九頁)。

〔付記〕 貴重な原本の閲覧に際しては大東急記念文庫の岡崎久司氏、村木敬子氏の格別の御高配を賜った。ここに記して深甚の謝意を表したい。